

幸せをカタチに

附属新潟中学校

二年

相馬

みなみ

新潟のお米はおいしいです。私は昔コシヒカリで有名な南魚沼市の六日町に住んでいました。お米で有名なだけあって、家の周りも田んぼだらけでした。冬、雪がたくさん降りると田んぼに積もった雪山で友達とスキーをします。春になると雪解け水が張る田んぼが緑色に染まり、暑い夏には夜、蛙が大合唱を稲にプレゼントします。そして秋には色々な思

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

い出のある田んぼにおいしいお米が実ります。1年間見守ってきたお米を家族で食べるときとても幸せな気持ちになりました。他にもごはんは、様々な場面で私に力をくれました。

例えば、小六の修学旅行で立山に登った時の、頂上で食べたいなり寿司です。三〇〇〇

メートルを越える山に登ったのは初めての体験でした。上り坂や下り道、岩だらけで登り

ずらいところもあり、とてもつらかったです。けれど、友達と励まし合いながらたどりついた頂

上からの景色と、そこで食べたいなりの寿司は
 とてもおいしか。たです。これまでがんばっ
 て、登りきることができたら良かったと思えま
 した。また、お米は私に力をくれただけでは
 なく、お米を食べることのありがたみを教え
 てくれることもありました。

私は家族でカニボリアに旅行に行つたこと
 があります。バスの中から見える町は、日本
 とは全く違ふものでした。バイクや大勢の人
 でにぎわう場所もあれば、月に数度しか来な

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

い病院に行列をつくらせて待つ人もいました。
 そんな国で食べたごはんはお米は入っていま
 せん。毎日、苦手なココナッツミルクの入っ
 た種類や、しぶいジャスミン茶を飲んでい
 りうちに、体力も無くなり、楽しんだり喜んだ
 りして幸せな気持ちになることができませ
 でした。その後日本に帰って食べたお米はと
 てもなつかしい味でした。

このように、この旅行ではごはんを食べる
 ニとの大切さを学ぶことができました。そし

て私はい、お米があること、おいしいごはんを
 食べることにあたり前のことになっていて、
 ではないかと思うようになりました。そこで、
 もしもお米が無かったら今の暮らしや食生活
 がどうなるのか考えてみました。

まず、食べることを重視していなかっただと
 思います。どの家庭にも、白いごはんにあう
 家庭の味のおかずが昔から受けつがれてさま
 した。その料理は世界に一つだけのおいしい
 食事です。お米が無かったらこのような伝統

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

かつくられることも無かったのではないかと
 思いました。

また、箸を使う文化も生まれていなかっ
 と思います。箸はい、今では食卓になくてはな
 らない、日本食の象徴です。しかしこれは、
 お米があるからこそ生まれた文化だと思いま
 す。お米が日本に伝わってこなければ、箸で
 はない別の象徴が生まれていたかもしれませ
 ん。

このように、お米は今の私たちの暮らしの礎

展に何らかの形でつながっているということ
 が分かりました。そしてお米は大切な存在だ
 ということに気がつきました。

私ほ、もしも今お米が無かったとしても、
 いつか必ずお米の文化が生まれていたと思
 います。なぜなら、ごはんを食べることで誰
 でも幸せな気持ちになれるからです。お米ほ
 ほとんど毎日食べているのでそのありがたみ
 や温かさを忘れてしまいがちです。けれど、
 いざお米を食べなくなると、いつもほあつた

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

食事の温かさや食べる楽しみが失われてしま
 うということか、カニボリア旅行での出来事
 からも学びました。なので、これからほごほ
 んの温かさを感じながら、一粒一粒のお米を
 大切に暮らしていきたいと思ひました。
 そして、いつでもどこでも家族と笑ひあつて
 食事をしたいと思ひます。私ほ、二のことに
 家庭の味を後世へ引き継ぎ、お米の形を残し
 たいです。